

聖書:エペソ人への手紙5章21～33節

説教:妻たちよ、夫たちよ

はじめに

今日の箇所を読んでどう思われたでしょうか。22節。「妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい。」夫である方にはにんまりされたかもしれないし、妻である方は不平を言いたくなる。パウロは男女差別主義者なのか。聖書は、人間の権利とか男女同権、そんな考え方が出てくるはるか昔のに書かれたもので、あまりにも古すぎて今の時代にはそぐわないということなのでしょう。そうでなくて、ここにも永遠の真理があるというのなら、それはどのようなことなのか。ともに見てまいります。

1 妻と夫

1) 妻たちよ

パウロはまず妻のことを先に取り上げます。22節は今読みましたので、23、24節を読みます。「キリストが教会のかしらであり、ご自分がそのからだの救い主であるように、夫は妻のかしらなのです。教会がキリストに従うように、妻もすべてにおいて夫に従いなさい。」

教会がなにごとにおいても真っ先にキリストを大切にします。キリストが教会のかしらなので、教会はキリストに従います。問題はその後です。それと同じように、妻はすべてにおいてかしらである夫に従うべきだ、と書いてある。妻の立場からこれは納得できますか。キリストは神であって、すべてが正しいので教会がキリストに従う。それはわかる。でも夫は人間で、妻の側から言わせれば、夫の性格は変にねじ曲がっていて、すぐに感情的になって怒り出す。そんな夫になんでも従いなさいと言うのか。そんなこといやです。だいたいそんな所ではないでしょうか。このことは一旦わきに置いて、その前にでは夫に対してはどのように言われているか、それを見てからまたこの問題を取り上げたいと思います。

2) 夫たちよ

まず25～27節。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つ

ない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」

いろいろ書いてありますが、一言でまとめればこうです。「あなたがたも妻を愛しなさい。」それで終わるのかと言えば、たたみかけるように28節でこう言う。「同様に夫たちも、自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する人は自分自身を愛しているのです。」ここで「愛さなければなりません」と訳しているところ、これをもっとストレートに言い直すと「夫は妻を愛する義務があります」、あるいは「夫は妻を愛さなければならぬ負い目がある」、
「妻を愛することにおいて夫には借金がある」、
そう書いてある。先ほどの25節ではたんなる「愛しなさい」という命令でした。でも、ここではもっと強い言い方になっていて、なんとしてでも義務を果たしなさい。そんな強い命令になっています。

3) どちらが厳しいのか

いま妻と夫に対して言われていたことを見てきました。ここで二つを比べてみましょう。「妻はすべてにおいて夫に従いなさい。」「夫は、自分の妻を愛する義務があります。」この二つです。比べて、どちらが厳しいと思いますか。妻の側からこういう意見が出そうです。「従いなさい」と言う方が厳しいに決まっている。だって、どんないやなことでも「はい、はい」と文句を言わずにやらなければならないということでしょう。それに比べて愛する方は実に簡単。妻に優しい言葉をかけて、いたわってあげればよい。こんな楽な話はない。

なんとなくこんな結論になりそうですが、このことを考えるポイントはキリストが私たちの模範であるということです。そこを見ない判断を間違ってしまう。ここではパウロは三つの模範を挙げているのですが、今日は時間の関係で二つに絞ります。

2 キリストの模範

1) かしらであり救い主 (23節)

一つ目は23節です。「キリストが教会のかしらであり、ご自分がそのからだの救い主であるように。」このようなキリストの模範に従って、妻はかしらである夫に従いなさい。そういう流れです。

「かしら」と聞けば、すぐに思い浮かぶのは偉いか偉くないかですから、夫が上で妻は下ということになる。いまの時代から見たらとんでもない差別に聞こえます。もう少し深掘りしましょう。鍵となるのは、「キリストが教会のかしら」であるということです。

2) かしらである方が低くなる (25節)

それで二つ目の模範、25節をもう一度読んでみます。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。」キリストが教会のためにご自分のからだを十字架でお献げになり、そのようにして神はご自分の愛を現してくださいました。さきほど、キリストは教会のかしらであると言いました。その「かしら」である方が教会のためにいのちをお捨てになります。ここがポイントです。こうなると、いったいどちらが偉いとかが偉くないとか、そんな話しではなくなってきました。キリストが教会の上に立つ方であるのにもかかわらず、この方は教会のために低くなられました。ということは、この「かしら」は、上に立つかしらではない。下に低くなる「かしら」だった。これがキリストの模範です。夫は妻の上に立つかしらで偉いのから妻は夫に従いなさい、ではない。全然反対だったので

3) いのちを捨てる愛

夫は妻を愛しなさい。愛する義務があるのだとさえ言われる。さて問題は どうやって愛を表すのか。キリストが模範です。キリストが教会のためにいのちをお捨てになったように、夫もいざとなったら妻のためにいのちを捨てる。これが愛することです。いざとなったら妻のために死ぬ覚悟があるかどうか。死ぬ覚悟がある夫こそが、本当の妻のかしらである。パウロはそう言っている。

さあ夫のみなさん。妻は夫に従えと書いてあるところでは喜んでいたかもしれませんが、妻のために死になさい。これを聞いて顔が青ざめるのではないですか。いっぼう、妻のみなさんは最初、従いなさいと聞いて不満たらたらだったかもしれない。でも、妻のために夫が死んでくれる、もしそんな夫であるなら従うことはできるかも知れない。そんなふうに前向きに思えるのではないのでしょうか。

3 結婚

1) 男女同権思想と比べると

今日の箇所、最初は、妻だけが差別されている時代遅れの思想にしか見えなかった。ところがよく読むと、夫の方に非常に厳しいことを言われていました。これを男女同権思想と比べてみましょう。たとえば、夫婦の間に問題が起きたらどうするか。そんなときは男女同権ですから、お互いに自分の権利を主張しますから、どンドンぶつかって話がこじれていく。男女同権思想ではこういうときどうするかについては何も語りません。せいぜい二人の話し合いで解決するか、それでもダメなら裁判するか。それしかない。みなそんなものだと思っている。

ところが聖書はまったく別なことを言う。夫婦の間に問題が起きたら、最終的にはかしらである夫が責任をとりなさい。いざとなったら夫は妻のためにいのちを捨てる覚悟を持って、妻を養い育てなさい。キリストがその模範です、と言うのです。もし自分の夫がこんな理想の夫だったらどうですか。奥様は幸せです。パウロに言われるまでもない。喜んで従うことになるでしょう。

2) アダムとエバ

でも夫の側は大変です。私自身も、妻のために死ぬ覚悟があるか、日々自分に問いかけられていて、妻の一言で腹を立てるようなとき、自分は妻のために死んでいないと実感します。頭では分かっているけれど、現実には難しい。多くの夫は悩んでいるはず。神の助けが必要です。神はどのように夫を助けるのでしょうか。

アダムとエバが結婚し、二人が罪を犯したときのことが創世記3章に書かれています。そのとき神はまず最初、だれに声をかけたのでしょうか。初めに木の実を食べたのはエバでした。ですからエバに声をかけたのかということそうではない。神が最初に問いかけたのは、アダムです。なぜならアダムがエバのかしらだから。その原則は創世記から始まっている。でもアダムはせっかくの悔い改めのチャンスであったのにもかかわらず、むしろ責任を逃れようとして神が悪いのだと言い、エバに責任をなすりつけてようとする。まったくひどい夫ですが、これが罪人の現実です。そんな二人に神はどうされたか。エバの子孫から、蛇の頭を打ち砕く救い主が現ることを告げます。ひどい夫婦でありながらも、神はなおもこの二人を救おうとされる。それが私たちの慰めです。理想の夫、そして妻にならないからこそ、私たちには神の助けが必要です。

3) 分に依って歩む

これまで同じ信仰を持つ夫と妻ということを前提に話をしてきました。でも、離婚を経験している方や、配偶者が未信者ですという方には肩身が狭い思いをしたかもしれません。でもパウロの時代も、同じような人たちがたくさんいました。パウロはそんな人たちのために別の箇所で教えています。離婚された方には第一コリント7章11節。

「もし別れたのなら、再婚せずにいるか、夫と和解するか、どちらかにしなさい。」

また信者でない夫を持つ妻に対しては、13, 14節です。「また、女の人に信者でない夫がいて、その夫と一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません。なぜなら、信者でない夫は妻によって聖なるものとされており、また、信者でない妻も信者である夫によって聖なるものとされているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れていることになりませんが、実際には聖なるものです。」

信仰が違うからと言ってそれだけで離婚の理由にはならない。いや、あなたは夫や子どもたちのためにすばらしいことをしているのだと励ますのです。それで結局17節でこう言う。「それぞれ主からいただいた分に応じて、またそれぞれ神から召されたときの状態で歩みなさい。」離婚された方も、夫がまだ救われていないという方も別に恥ずかしがることではない。キリストはどんな人にも同じ恵みを与えようとして十字架でのちを捨ててくださいました。

今のおかれたところで、神の助けをいただきながら歩んでまいります。